

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

法華寺のカラブロがどのように當まっていたのかを調べるために寺の文書を調べたことがある。先代の久我高照門跡も加わり、机を並べて数人で寺の日記などを繰りながら「風呂」「浴室」などの文字を追った。史料は少しづつ出てきた。途中休憩して、そろって水菓子をいただいた。門跡の誠実な人柄と穏やかな時間の流れを今も印象的に覚えている。

浴室講中が残した1845(弘化2)年の「浴室修復寄進帳」には、「光明皇后仏法を深く信じ給ふ余りに、伽藍御造営之後、風呂をたてさせみづから千人の垢をかき

なんと誓ひ給ひて、九百九拾九人をかき給へり、今ひとり来る者は癩病と書を調べたことがある。先代の久我高照門跡も加わり、机を並べて数人で寺の日記などを繰りながら「風呂」「浴室」などの文字を追った。史料は少しづつ出てきた。途中休憩して、そろって水菓子をいただいた。門跡の誠実な人柄と穏やかな時

間の流れを今も印象的に覚えている。

法華寺のカラブロがどうして機能していた」と読み解いている(『湯屋の皇后光明皇后湯施行の物語をめぐりて』1998)。

法華寺のカラブロがどうして機能していた」と読み解いている(『湯屋の皇后光明皇后湯施行の物語をめぐりて』1998)。

有名な「千人施浴伝説」

と記されていた。よく知られた光明皇后千人施浴伝説だが、幕末期にも語り継がれていたことがわかる。この施浴伝説は、やく1191(建久2)年に、ある女院が南都諸寺を巡礼した時の記録



法華寺のカラブロの内部の風呂屋形(修理前)

『建久御巡礼記』、その百年ほど後の『法華滅罪寺縁起』、さらに僧伝などを記した『元亨釈書』(1322)などに、さまざまな異相を伴い、語り継がれてきた。皇后が蒸し風呂を焚いたことについて、宗教者の阿部泰郎氏は、

1908(明治41)年以来、たびたび奈良を訪れたままの湯釜も新調されて、久し振りに焚かれた時、私も入らせてもらつた。男女別の小部屋は、汗ができないくらい熱い蒸氣で充満し、2、3分しか入っていられなかつた。これを何回か繰り返すと、出てからも体から汗が湧き出で止まらない。

「当時の差別観や身分の秩序を、ひいては国家や王権というものを成り立たしむる神話として機能していた」と読み解いている(『湯屋の皇后光明皇后湯施行の物語をめぐりて』1998)。